

あら 荒川の水を、むかしはどのように利用していたのかな？

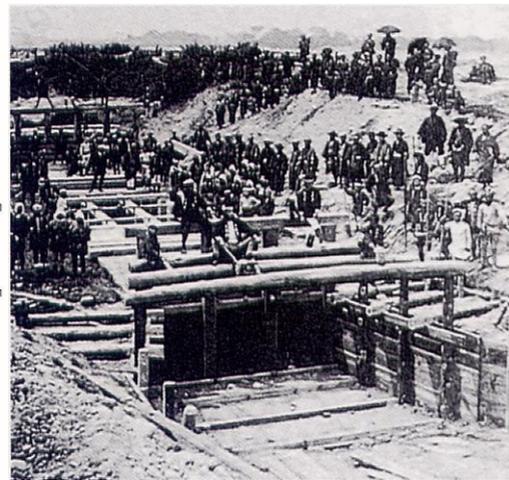
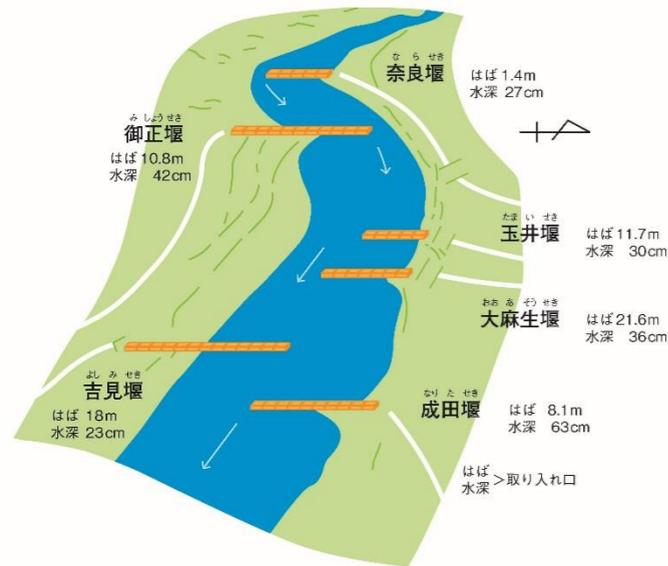
さいたま いなさく せき 埼玉県を稲作地帯にした堰と用水路

江戸時代の河道つけかえは、中流部や下流部の洪水ひ害を防ぐとともに、新田を開くことも目的の一つでした。

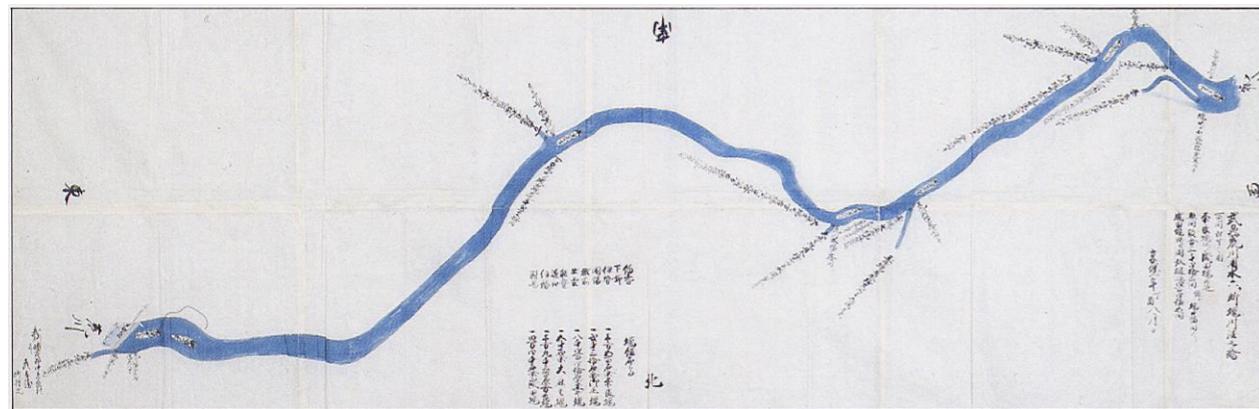
中流部では、荒川につくられた堰から、用水路に水を引き、新田を開きました。

それまでは、洪水の時ははんらん原だった場所だったので、土地が肥えていたこともあって、この地域は豊作地帯となって、地域の経済を安定させました。

●六つの堰…江戸時代初期、荒川から用水を取り入れるために六つの取り入れ口（堰）がつけられました。



御正堰用水改修工事のようす(明治44年) 水路は木で作られました。 画像提供:熊谷市立江南文化財センター



六堰のようすをえがいた江戸時代の絵図(野中家文書) 画像提供:野中信子氏

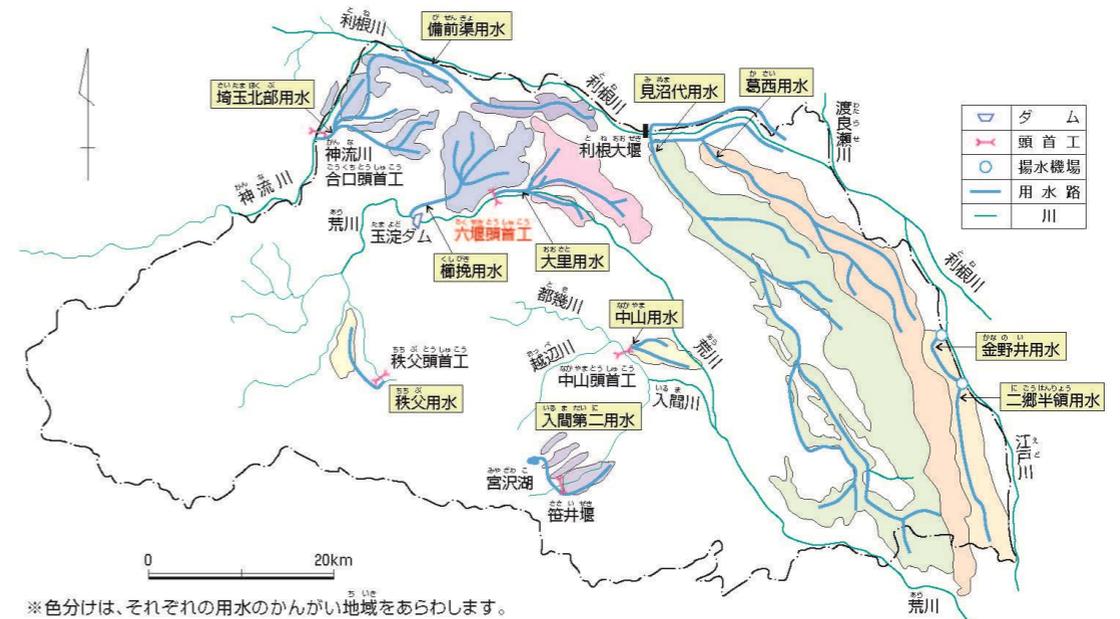
あたらしい六堰

六ヶ所で取り入れられていた用水をまとめ、昭和14年から供給し続けてきた旧六堰頭首工は、近年では老朽化が進み、働きがおとろえていたため、平成10~14年度にかけて改築しました。

新六堰頭首工(平成15年3月完成)



さいたま のうぎょうようすい 埼玉県のおもな農業用水



川の豆知識 水をめぐって起きた争い

荒川の水は、多くの農民に恵みをもたらしました。しかし、荒川は水が不足するかつ水にもみまわれやすく、そのたびに水をめぐって農民どうしの大げんかが起きました。けんかは、川をはさんで石を投げあうというものでした。

昭和14年に六堰頭首工が完成してからは、争ったりすることは無くなりました。

